

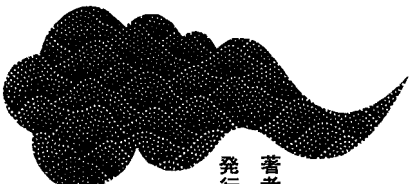
祇園女御

瀬戸内晴美長編選集……

第四卷

御瀬戸内晴美長編選集 第四卷

講談社



瀬戸内晴美長編選集 第四巻―祇園女御

昭和四十九年二月二十八日第一刷

著者―瀬戸内晴美 造本―杉浦康平・海保透 発行者―野間省一

発行所―株式会社講談社 東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二―

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所―豊国印刷株式会社・株式会社興陽社 製本所―黒柳製本株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

©瀬戸内晴美 昭和四十九年 Printed in Japan

瀬戸内晴美長編選集 第四卷 目次

祇園女御

5

花野

411



祇園女御

その後世に

中世の宮廷女流日記のひとつとして伝わっている「とはずがたり」は、これから書きつづけようとする物語の時代よりは、更に百七十年ばかり後の時代について書かれたものである。その「とはずがたり」の中のある一章について、特に物語のはじめに想いをよせたくなるのは、私のこれから描こうとするひとりの女御の出生についての疑惑をも、このあたりからときおこすことが出来はしないかと考えるからである。

「とはずがたり」は後深草上皇の寵愛した宮廷の女房の一人、二条と呼ばれる久我家の出の一女性の手になっている。

二条は生れた翌年母に死別しており、四歳の時から後深草上皇の許に引きとられ、未来の女房として、宮廷の中で育てられている。

上皇は十二、三歳の少年の日、二条の母の大納言典侍に「新枕のこと」を教えられた関係から、初恋の忘れ難い年上の女房の遺児を引き取り、「あこ、あこ」と呼んで寵愛した。典侍は、少年の上皇と愛のたわむれのあった頃からほとんどなく、源雅忠と結ばれて二条を生んだので、上皇にとっては、初恋の女から、新枕も失恋もともに教えられたことになる。それだけに、上皇が幼い二条の成長のうちに、忘れ難い女の佛を認めようとする夢はひとしおだった

ことだろう。

二条が十四歳になった正月、上皇はこの長い歳月はぐくみつづけた夢の果実を味わった。

すでに上皇は十一歳年上の叔母にあたる公子を迎えていたが、もちろんそんな公子との仲がじっくりいっていた筈もないだろう。

光源氏が幼い紫の上を、昔の恋人の姪だという理由でひきとり、その成長を待ちのぞみ妻にしたのと、まるでそっくりな上皇と二条の関係は、そもそもの物語めいているが、二条は、貞淑で理想的な紫の上にくらべ、はるかに情熱的で奔放な血を持っていた。

上皇の寵姫でありながら、二条は、上皇以外の男幾人とも通じてしまい、その男たちの子供を何度か妊っている。

紫の上の身の上に、和泉式部の情熱的な恋の経験を加えたようなのが二条の劇的な生涯だったといえるだろうか。

「とはずがたり」は、二条が、晩年、世の無常を悟り、出家して女西行のように全国を流浪して歩いた後、自分の愛欲生活のすべてを大胆率直に書き綴った日記である。

私が今、ここに引きだしたいのは、その中の、二条の初恋の人西園寺実兼の子を、上皇に秘密で二条が産み落す場面なのである。

西園寺実兼は、「とはずがたり」の中では、「雪の曙」と

いう仮称であらわされている。

実兼は後深草上皇とは従兄弟に当り、二条とは又従兄弟の關係になる。上皇より六歳若く、二条よりは九歳の年長だった。

二十三歳ですでに西園寺家の当主となり、後に四十三歳で内大臣、四十五歳で太政大臣にまで進んでいる一世の政治家だったし、玉葉集に歌が五十七首も入選しているほどの文雅の人でもあったようだ。

後深草上皇が、はじめて二条を女として愛そうと思ひ定め、二条の宿下りをしていた父雅忠の家を訪れた夜、家じゅうこぞつて祝宴をあげているのに、二条はそのわけのみこめず、頑是なく、ひとり先で寝こけてしまったほどの無邪気さだった。

目が覚めた時、上皇がすぐ傍に添ひ伏しているのに気づき、驚きのあまり飛びおきて逃げ出そうとさえた。そんな稚純さのうちにも、すでにもう、西園寺実兼からは、恋文を受取っており、自分の方でもほのかな初恋を、それと自覚しないままに抱いているようであった。

二条が公然と上皇の寵姫となつて後は、実兼の恋はあくまでも秘められなければならなかったが、実兼は、二条への恋を、忘れもあきらめもしようとはしなかった。

「お前が私の初恋の、恋しい人のおなかにいる時から憧れて、この子こそ自分のものにしようと思ひつづけてきたのだもの、可愛いくない筈があろうか」

そんな述懐をそそぐ上皇の子を、二条は翌十五歳で妊

り、万事は二条を幸福な光りの座に導くように見えた。懷妊中、乳母の家に里帰りしている時に実兼の訪れをうけ、父の喪中であるにもかかわらず、ついに六ヵ月の身重の軀で契つてしまう。

最初は、

「こんな身重な身でお情けをうけるなどとてもないことです」

と、強硬にこばんでいても、男が、

「そんな身重のあなたに、どうして乱暴なことを出来るのですか。ただそつと、よりそわせて下さい。せめてあなたを静かに抱かせて下さい。清らかな添寝なら、伊勢の大神宮だつてよもおとがめにはならないでしょう」

など、真面目らしく誓つてみせると、他愛なく男を受けいれ、たちまち防ぎようもなくふみこまれてしまうのだった。天性身を守る意志は薄く、男の情熱の波には、前後も忘れ、押し流される脆さを持っていた。

その上、この怖ろしい秘密を、神が上皇の夢に告げられはしまいかと稚くおびえながら、その一方、ひきつづき、次の夜も、また次の夜も、男を拒みきれない。

——とかくしつづ、あまた夜も重なれば、心に沁む節々もおぼえて——

と、男の情熱に押し流され、次第にこの密男みせおへの愛を深めている。

妊娠七ヵ月の終りまで、密会を重ね、表はさりげなく、二条十六歳の二月、上皇の皇子を無事産みおとしている。

当然将来の国母の地位まで予想される華やかな運命がめぐってきたのだ。それでもなお、秘密の恋を断ちきる強さは身にも心にもなく、その年の十二月の里帰りの折に、またしても密会を重ね、ついに実兼の罪の子を宿してしまう。

もうその頃は、実兼と夜をすごした朝のふたりの間に、上皇の便りがとどき、

「お前が誰かと袂を重ねて寝た夢を見たが」

などと問いかけられ、胸を騒がせながらも、

「独り寝に上皇さまのことばかり思い、自分の袖しか片敷かぬ私の袂には、月の光りだけが袖を重ねてくれるだけです」

など、ぬけぬけと、返事を送れる女の魔性をも具えていた。

年が改まり、二月の末頃ともなると、二条はもう、まごうこともない悪阻の兆候におびえなければならなかった。

朝から胸がもたれ、ひねもす軀は熱っぽく、何をすめられても、食べ物に箸がのびない。

皇子を産んだ経験にてらしあわせて、もうどうしようもないしるしだと思ひしるにつけ、年の瀬の実兼との秘かな報いが、こうもすみやかに容赦なく下されたのかと思うと、上皇の夜の室に召されても、身も心もすくむ思いで生きた空もない。

「二条はしばらく逢わない間に、すっかり熟しきった果実のような、柔かな匂いの濃い女に成長している。そのく

せ、何だかよそよそしくなつて、別の女を抱いているような不安な気がする」とあるのはどういうわけだろう」

上皇の睦言の中にそんなことはざりげなくはさまれると、二条は乳房の渾や、脇のしげみの中に、じつとりと冷たい汗がふきだすような脅えにつつまれ、ものもいえず、ただ、ひしと上皇にしがみついてしまう。

「御所さまが、あんまりかまつて下さらないから、さまざまのことはみんな忘れてしまつて、はじめて御所さまを父の家にお迎えした夜のように、氣恥しく怖い気持ちになるのかもしれない」

「他愛もないことを。これで皇子の母となつた人かと思ふと不思議な気がする。どうしてだか、お前だけは、いつまでたつても、昔、懷に抱いて可愛がつていた時の気持ちが残っているせいか、頼りなくいじらしく、片時も目が離せないような気がするのだよ」

そんなことを聞くにつけ、罪深さにおののいてくる軀の震えを、上皇は、女の情熱の素直なあらわれだと思ひちがえ、いつそう力をこめてかき抱くのも空怖ろしい。

たまたま、上皇は、新年のはじめから、二月の十七日まで、誓願事の為、潔斎し、女たちはいっさい遠ざけて、清らかに過ぎたから、尚のこと、上皇の胤を宿したとは、いいつくろふことはむづかしかった。

心苦しきのあまり、上皇の手まへは、何のかのと神詣などにかこつけて、里帰りする日を多くし、御所へは上らないようにはからつていた。

実兼は、そんな二条の態度を、自分への恋の深くなったあらわれとも思ったのか、里居の二条の許へ、一日も欠かさず通いつめてくる。

ある夜、実兼は、女の黒髪の上に濡れながら、掌の中の重い宝珠をぎゅしりと握りしめておいて、急に几帳のかげの燭台を片手でひきよせた。

「あれ、何をなさるのです」

二条が恥しさのあまり、黒髪でとっさにかくそうとする軀を、実兼は灯の中にひきこみ、二条の手も脚も自分の軀で押えこんでしまった。

「やっぱり、そうだったんですね。どうして早くうちあけてくれないのです。もともと豊かなあなたの乳房が、この日ごろ、とみに掌からあふれそうに実ってきたし、秋海棠の花びらのようだったあなたの乳首が野苺のように色づいてきた。まさか、上皇の御子ではないのでしょうか」

「あんまりな……どなたの子かは、神仏とあなただけが御存じの筈なのに……」

黒髪は波の中に小さな顔を沈めこんで、可憐な泣き声をあげる女を、実兼は力をこめてかき抱いた。

秘密の恋だけに女がいじらしく、秘密の子だけにそのいのちがいとしかった。

実兼は、もう世間も神仏も怖れない大胆さで、夜となく昼となく、二条の許に通いつづける。

それでも、やはり心の落ちついた日には、

「何とかして上皇に気づかれないうちに、すべてが無事に

終らないことだろうか」

などと、もつともな心配を洩らしてしまふ。

五月頃になると、上皇にも、もう妊ったことはかくしやうもなくなったので、二月の末上皇の潔斎の終った後で、愛を受けた時の子供らしいといいつくろってしまった。

六ヵ月になるのを四ヵ月だとごまかしている不自然さが、たとえ上皇の目はだませても、意地の悪い院の女房たちの穿鑿好きの鋭い目をごまかせるわけもあるまいと思うと、事の顛われた日の恥辱と仏罰の恐ろしさに、夢にもうなされつづけてしまふ。

いっそどこかの川の瀬の底に身を沈めようかと思つても、源氏物語の浮舟のように、助けあげられる時の恥を想うと、それも決心がつきかねるのだった。

六月になると、しきたり通りに、四月目の腹帯を院からさずかつて、着帯の儀式がある。

実兼は、その二、三日間、無理やり二条を里に下らせ、自分で腹帯を持つて来た。

「四月目にしてあげなければならぬのに、あなたは院に上りつぱなしだし、私の方もいつい世間をはばかつてのびのびになってしまったけれど、いよいよ上皇からの着帯が十二日にあると聞いたから、たまらなくなつて持つて来た。本当の父親の手で、さあ、帯をしてあげよう」

ふだんは、大きな袴や、かさばった桂のかげにかくされているお腹も、それらをとりさつて見れば、もうあきらかに育ったもののいのちの大きなさを示し、二条の軀つきは

すっかり変っている。

青白くはりきつていて、いっそうすべすべと艶の出た下腹に頬を押しあて、実兼は、

「わこのいきづきが伝ってくる。ほら、あなたのあの時の胸の小鼓のようなたくましい性急な声だ」

などという。

それから五日目に、そしらぬ顔で、院からの使いの上皇の腹帯を受けとった時、二条は、もう自分が赤子もろとも地獄に堕ちる未来しか思い描けず、使いの帰る足音がまだ門に聞えるというのに、声を放って泣き伏してしまった。

いよいよ九月という産み月を迎えて、二条は、お産の支度があるからといつくり、院をぬけだした。

その夜すぐ、実兼がかけつけ、傍につきつきりて命令する。

「いいですか。すぐ、重い病気にかかり、陰陽師が、人の嫌がる伝染病だと診たてたと、院に報告なさい」

もうこうなれば、男のいうままにするしかなかった。実兼の演出通りに院をあざむいて、門を閉ざし、誰にも逢わず、気心の許せる腹心の侍女を二人だけ身近に使って、来る日も来る日も寝て暮していた。

二人の侍女に、湯水も通らない程重病だといふらさせ、院にも、御使いなどに伝染すると悪いからという理由で、手紙も見舞いもよこしてもらわないように工作する。

実兼はそれをいい都合にして、夜も昼も、二条に添い伏し、看病になみなみでない誠意を見せてくれるのだけが、

せめてもの命綱だった。

勤めのある実兼が、そんなことをするには、それだけの苦心があつて、世間へは春日神社に参籠しているといふらし、腹心の家司には、

「そのつもりで、うかつに手紙の返事なども書かないように」

などいいかせているのを聞くと、この男も、道ならぬ恋に落ちただけに、こんな切ない苦勞をさせるのかと、二条はいっそう心細く、自分たちの将来が真暗な道にしか見えて来ない。

「このお産では、あらゆる神罰が当たって、私はきつと死んでしまうような気がします」

実兼の胸にとりすがっている時だけが、苦しみを男の胸に預けられて、わずかな安らぎが得られる。

「私がついているのに、何をそんなに心細がるのだろう。どうせ、上皇の想い者に恋をしかけるといふ大それた決心を固めた瞬間から、私は神罰も仏罰も怖れてはいないのですよ。地獄があるなら、地獄の底まであなたを抱いていこう。地獄の火に焼かれるなら、あなたを抱きしめ、私の肉を先に焰になめさせよう。あなたの口を私の口でふさいで息をとめてあげる。地獄の火があなたの白い膚にとどく前に、あなたは私の愛情で窒息死させられていて、何の苦しみもしらないだろう。上皇の御子を、あなたは愛の獣にもならないうちに宿してしまつたと私に告白したではありませんか。あなたが上皇にどれほど愛されていたとしても、

私の触れるまでのあなたは、あんなに固い蕾だった。女の軀は受身の愛だけでは花開くものではないということを、私はあなたに教えられたのですよ。恋の切なさ、罪の想いの苦しさからしぼりだされる涙が、蕾の固さを柔らげ、花の匂いをもすのびたことを、あなたは身を以って私に教えてくれたのですよ。この子の生まれたことは決して私たちの間がかりそめの遊びでなかったあかしだと思えばいいのです。この子のことはもう、何もかも私にまかせきっておきなさい。こうして抱えているあなたは、あんまり可憐で可愛らしくて、この人がもうすでに母であつたり、またもうひとり子供を生もうとしているなど信じられなくなってしまう。どうしてあなたは、こんなにいじらしく、男の心をいとしさでいっぱいにする女に生まれついているのだらう」

実兼は幾度くりかえしてもあきたりない二条への愛情を、ことばと愛撫にしてあびせつづける。

やがてその月も暮れ、九月ももうま近になつたある暁方、二条は、いよいよ覚えのあるきざしを感じてきた。二人の侍女だけが、それと察して、湯をわかしたり、汚れを清める布を集めたりして、さしせまつたお産の用意をするのを見るにつけても、二条は上皇の御子を産んだ時の華々しさを思いださずにはいられない。それにあの初産には、お産の怖ろしさと未経験の無知から、いよいよの陣痛まで、のんびりした気分であつたのにくらべ、今度は、あの苦しみの上に、罪の子を産むという心のとがめが重なる

から、二条の心細さは、かぎりもない。もしこのまま、お産で死んでしまつたら、どんな不評判が世間にたち、上皇の御耳にも、ついにこの罪が聞こえるにちがいないと思うと、死ぬにも死にきれない切なさのこのつらさだつた。

灯ともし頃から、いよいよ、もうその時が迫つたという自覚があるけれど、こんなひめやかなお産なので、魔除けの弦打ちなどをしてもらうわけにもいかず、産屋の屋根にも、戸の周囲にも、さまざまな魔者の異形の影がおしひしめいているような幻を見て、うなされ、全身冷汗に、しとどにぬれてしまふのだつた。

間近になつたさしこみの激痛のあまりの激しさにこらえかねて、われにもない呻き声と共に、床の上にとび起き、のけぞりそうになつた時、実兼がしっかり抱きしめて、「こんな難産の時は、産婦の腰を抱いてうながしてやるのだと聞いていたけれど、そんなこともしないから、こんなにとどこおって苦しむのだらうか。可哀そうに。さ、しっかりするのですよ、私にすがって、氣をたしかに持って、しっかり産むのですよ」

と励ましてやる。二条は思わず、力まかせに男の胸にしがみついた時、熱いものがほとばしり、全身からすつと力がぬけていった。

赤子の泣き声が、氣の遠くなりかけた二条の意識をよびもどした時、

「ああ、よかった。お手がらだつた。よくこらえたね」という実兼の声も二条の耳に入ってきた。

「氣付けのおも湯を早くのましなさい」

どこで覚えてきたのか、実兼が、氣も転倒している侍女に命じている。

実兼は、血みどろの赤子を腕にしたまま、片手で枕元の守り刀をとり、口でその鞘を払うと、臍の緒を断ち切つて、いつ用意していたのか麻糸で手早く血止めをする。

初湯で清め、きれいになった赤子を、実兼は、二条の顔の前に近づけてやった。

「ほら、きれいな女の子だよ。目もとがあなたそっくりだ」

赤子は黒々と髪がはえそろつていて目がぱっちりで見開き、さし出された燭台の灯がまだまぶしくもないのかまばたきもしない。

もう一目見たいと、二条が肩をもちあげようとした時、実兼は、真新しい白絹の産衣に赤子をくるっと包みこんでしまい、胸に抱きしめたまま、物もいわず、さっと部屋を走り出していった。

ほどなく、ひとりで帰つて来た実兼は、二条の床の中にすべりこみ、女を柔かく抱きよせた。

「かわいそうに」

ひと言つぶやいただけで、女の黒髪の中に顔を沈めこんでいった。

実兼は、赤子をどこへやったか、ひと言も二条には打ちあけない。

「どうせ、いっしょに暮せない子供なら、なまじ、どこに

どうしているかなど知らない方があきらめがつくというものです。私にとつても可愛い子供なのだから、どうして悪いようにするだろう」

「こんなことになるなら、せめてもう一度よく見せて下さればよかったのに」

そういう嘆きをしている閑もなく夜があけてしまったので、院へは、

「ずっと病氣だったのが、特にひどくなったせいとか、今朝方、流産してしまいました。女の御子と見わけられるくらいに大きくなつていましたのに」

と、まことしやかに奏上しておく。上皇は、

「熱などつづくと、よくそういうこともあるものだ。氣をおとさず、養生して、産後百ヵ日もしたら、早く帰つてくるように」

というお返事があつたのを、一つ床の中で実兼と頬をよせあつて読み、ともかく、これで密事は闇から闇に葬ることが出来たと、ほっと顔を見合すのだった。

この日とほとんど時を同じくして、実兼の北の方がやはり出産し、その子は死産していた。実兼は、二条の赤子を、死んだ吾子とすりかえ、秘かに育て、妻にさえ気づかせなかった。

二条はこの女の子をはじめとして、後には上皇の腹ちがいの皇弟、性助法親王、「とはすがたり」の中では「有明の阿闍梨」との間にも、不義の子を二人産んでいる。

阿闍梨との関係は、上皇に氣付かれてしまつて、半ば上

皇の黙認の上でつづけられていたので、二条にとっては、実兼の子を産む時ほどの脅えはなかったが、やはり、とても自分の手許に置ける子ではなかった。

産み月が近づき、乳母の家に里帰りしている二条の許へ、ある夜、身分の低い者の乗る網代車に、しのんで上皇御自身が身をやつし、訪れてきた。

「お前と阿闍梨の仲の噂が、もうかくれようもない評判になって、都じゅうに取沙汰されているという。私のことまであることないこと聞き苦しく噂されているそう。この上、お前が阿闍梨の子を産んだとなれば、どんな噂の根が後にひくかもしれない。たまたま、私のかくし女がつい先日、死産したのを、とりあえず、誰にもいうなといって、事を伏せてある。そこへ、お前と阿闍梨の子をつれていて、お前の子は死産だとしておきなさい。二人の情事の証拠の子供さえ居なくなれば、何とでも噂をいつくろうことも出来るだろう」

上皇が二条の枕許で、しみじみそんな心配りを語って聞かせるのに、二条はかえすことばも出て来ない。七年前にやはり上皇の目を盗んで密かに産んだ実兼の子の処置と、全く同じことを上皇が考えたつかれたのも、何かの因縁めいて恐ろしい。

まさか上皇が、実兼との女の子のことを承知の上で、そんなことをいいたすとも思えないけれど、阿闍梨との密通を黙認し、むしろ、時によつてはこの不義の恋をそそのかすような気配もみせる複雑な上皇の本心は、二条には掴み

きれないのだった。

政治の実権が、鎌倉の北条幕府に移り、皇室はただ華やかな形骸だけを止めていた有閑そのものの宮廷が、二条が仕えた頃の「とはずがたり」の宮廷内であり、後深草院の生活であった。

私のこれから書き継ぐとする時代はその頃より百七十年さかのぼった、院政の始められた白河法皇の時代で、それまで摂関の手にゆだねられていた政治の実権が、朝廷にとりかえされた画期的な時代なのだから、同じ院といつても、その性質はちがうだろうし、院内の雰囲気も大いに異っていたことだろう。

けれども、宮廷という特殊な生活環境の中の習慣や、そこでくりかえされる、君主を中心とした男女の愛欲図絵の拡がりには、さして大差があったとは思えないのである。

「とはずがたり」の中の、二条がたどる女の愛欲中心の運命の波や、そこに描かれている様々な恋の型や、挿話の経緯など、すべてをみな、この物語に先だつこと三百年の昔に書かれた「源氏物語」の中に、その典型を探し出すことが出来るのを見ても、政權の移り変わりや、時代の流れの曲折にかかわらず、宮廷内の男女関係、まして、そこに送りこまれた女の運命や生き方、ひいてはその心をしめる恋の哀歓の影は、それほど進歩も変化も見られないような気がする。

宮廷に上がった貴族の女たちの貞操が、いかに頼りなく、守られ難いものであったかは、源氏物語にも書かれて

いる。

天子の寵愛を一身に受ける中宮や女御でさえ、密男みつおを几帳のかげにひき入れる機会にはことかかなかったし、その秘密の子を、そしらぬ顔で天子の子だといいくるめることもあったのだから、一応、もののしい家系図に名前のがっているやんごとない皇族の血筋も、名ある貴族の血統も、実のところ、どんな血が入りまじっているともしれたものではないのである。

平清盛が、白河法皇の落胤だという説は、今では歴史学者の認めているところだし、鳥羽天皇の皇子と皇統系図では示されている崇徳天皇さえ、まことは白河法皇の皇子だったと歴史家は証明しているのである。

そうしてみれば、今、私たちに残され、私たちが一応信じている、この時代の系図に頼る人間関係など、どこまで信じ、どこから疑っているものやら、さっぱりめどもつきかねることになる。

その混沌ぶり曖昧さが、物語の作者にとっては、「空想」という便利なひとことで、どこまでも、想像や妄想の翅を押しのける所以でもある。

たとえば、二条が十七歳で産んだ実兼の娘に、二条は二十歳の五月、実兼のはからいで逢っているが、それも、もし、実兼が、二条の心情をあわれんで、本当は死産などしなかった本妻の娘と逢わしていたと仮定したら——

また、後深草上皇が、自分の隠し女の子として育てようといつて、つれ去った、二条と有明の阿闍梨の間に出来た

不義の男の子も、実際は上皇の手で、どこかへ運び去られてしまっていたとしても——おそらく、上皇身辺の系図には残る筈もない子供の運命なのだから、杳として行方もわからなくなっているも仕方がないだろう。

今ほど戸籍法の厳しくなかった時代のことだから、不義の子は、どんな形ででも、親の周囲から抹殺されることがあったにちがいない。

罪の恋から生まれおちた子は、相当な金銀をつけて、しかるべき者のところへひそかに貰われていったかもしれないし、それを預った家来は、主人の命令か、あるいは自分のはからいで、白絹に包み、金欄の錦の守り袋をつけた赤子を、人の家の軒下や、竹藪の中にこっそり捨てて来はしなかっただろうか。

竹取物語の中の竹取の翁が、竹の中からみつけたというかぐや姫だつて、やはりこうしたわけのあるやんごとなき姫が、こっそり竹藪の大竹の切り口に捨てられてあったのかもしれない。

平安朝時代が才女時代といわれても、紫式部や清少納言や和泉式部の本当の名前も伝わっていない。最近、紫式部の本名が学者の研究によって発見されたと、学界を賑わしたことがあったくらい、彼女等の名前が伝わるなどほとんどあり得ないのだった。女御に上がるような摂関家の娘たちならともかく、受領じうりやうの娘程度では、いくら宮廷に上がり、才質を誇ったところで、誰それの娘、誰それの妻と呼ばれるだけでことたりていた。